The New York Times

MOMAが真っ向からファッションに飛び込む

■日付：October 6, 2017
■分類：全国紙
■国：アメリカ
■文：Roberta Smith (ロベルタ・スミス)

METコスチューム・インスティチュートに対抗して、近代美術館が1944年以来初の衣服デザイン展を開催。メトロポリタン美術館コスチューム・インスティチュート（Metropolitan Museum of Art's Costume Institute）は、コム デギャルソン、中国、アレキサンダー・マックィーン（Alexander McQueen）をテーマにする素晴らしい展覧会を開催して称賛されてきたが、ようやくライバルが現れた。このテーマを70年間無視してきた近代美術館（Museum of Modern Art: MOMA）が、ついにファッションやそれにまつわるトピックに、真っ向から飛び込んだのだ。「Items: Is Fashion Modern?（アイテムズ：ファッションはモダンか？）」と題されたこの展覧会は、この間の後れを取り戻すための精力的な取り組みであり、衣服のデザインにテーマを絞った展覧会はMOMA史上まだ2回目だ。前回の展覧会「Are Clothes Modern?（衣服はモダンか？）」は、1944年にバーナード・ルドフスキー（Bernard Rudofsky）が企画・構成した。彼は挑戦的な建築家兼社会史家で、大部分の衣服は「時代錯誤で不合理で有害だ」と断じたのだ。

〔訳注：キャプション〕
MOMAにて。右側の展示品：「Dockers（ドッカーズ）」のパンツ、1990年代；ヨハネスブルクのクリエイティブ集団「Sartists（サーティスツ）」によるパッチワーク・スーツ、靴、帽子、2017年；「Halston（ホルストン）」のドレス。1974年頃。マーク・ウィッケンズ（Mark Wickens）が『ニューヨーク・タイムズ』紙のために撮影。

本展は野心的で、観る者に広くアピールする要素をもつハイ・コンセプトな取り組みだ。理解するために役立つのが、「豊富（profuse）」というキーワードだ。企画・構成を担当したのはMOMA建築・デザイン部門のシニア・キューレーターを務めるパオラ・アントネッリ（Paola Antonelli）と、キューレートリアル・アシスタントのミシェル・ミラー・フィッシャー（Michelle Millar Fisher）である。何年も掛けてリサーチをし、各地を旅した末に実現した展示の内容は、審美的であるのと同じくらい人類学的でもある。

この企画展は6階にあるギャラリー全てを占める大掛かりなもので、これ程の規模は2011年に行われたデ・クーニング（de Kooning）の豪華な展覧会以来だ。ビデオとスライド・ショーの使い方が見事だ。約30点のプロトタイプのうち20点はMOMAが新たに委嘱した作品で、創意工夫の輝かしいひらめきをプラスしている。そしてもちろんギフト・ショップもあり、いつにも増してファッション関連グッズを購入したい誘惑にかられる。

しかし、全般に「Items」展では、最高のクラフツマンシップやイノベーションや贅沢な素材を目にして思わず立ち止まってしまうといった瞬間は、非常に少ない。この点はメトロポリタン美術館の展示と異なる。本展にはブルー・ジーンズやビーチ・サンダルや、タトゥーや〔イスラム女性が着る肌を覆う水着の〕ブルキニといった「アイテム」が含まれており、この種の冒険的な試みにつきものの高価さや排他性や尊大な雰囲気はおおむね排除されている。少々質素ですらあるので、最新の台所用品や家具を披露していた1930〜40年代のMOMAの展示を思い起こさせる――これは現代生活を改善する手頃な方法として現代デザインが論じられていたことの証しである。本展の名誉のために言っておくが、これは、サブカルチャー（下位文化）と植民地の国々が西洋の主流派になっていくにつれ、スタイルにまつわる慣行が変遷したことを描き、自己表現と政治的抵抗活動としての衣服に焦点を当てた、人々の意識を高めるための試みなのだ。これを最も直接的に示す好例が、グラフィックTシャツの映像である。

〔訳注：キャプション〕

111種類の展示品の一部：ブルキニ水着、アヒーダ（Ahiida）作；ビーチ・サンダル（1962年のオリジナル版の復刻版）、Havaianas（ハワイアナス）。マーク・ウィッケンズが『ニューヨーク・タイムズ』紙のために撮影。

アートの歴史を連続的に語るという同美術館の方針を忠実に守りながら、「Items」展は主に西洋の現象を取り上げている。しかし、よりグローバルな範囲を対象とし、歴史的意義を意識するという独自の基準も設けて、こちらも忠実に守っている。

本展の核心は、主に戦後の衣服とアクセサリー類の「紳士録」――すなわちプレス向けの声明で「デザインのかがみ」と称されている111種類のアイテムである。それらをまとめたリストが本展入口の大きな壁全体に掲示されていて、選ばれたアイテムを身に着けた「現実の」人々の向かい側で、それらを紹介するスライド・ショーが上映されている。各ギャラリーに選ばれたアイテムの実例が展示されており、多くはその影響を証明するバリエーションと、そのプロトタイプ（試作品）も添えてある。全般にそれらは過去の名作への返答、もしくはその延長である。

例えば、南アフリカのテキスタイル・デザイナー、Laduma Ngxokoloは、由緒あるアラン諸島のフィッシャーマン・セーターをモチーフにし、ケーブル編み模様に鮮やかで深みのある色をプラスすることで、新たな命を吹き込んでいる。パーソナライズに特化した新興企業Unmade（アンメイド）による「Bret.on（ブレトン）」プロジェクトは、もともとフランスの水兵が着ていたブルーと白の縞柄のプルオーバーをベースにして、ユーザー自身がシュールリアリスティックな渦巻きを描き加えられるようにするコンピュータ・プログラムを考案した。また中国人のデザイナー、シジュン・ワン（Zhijun Wang）は、素材にデザイナー・スニーカーを使用した、ベーシックな外科手術用マスクをいかつくボリュームアップして見せた。フェティッシュに崇められているスニーカーを、世紀末後の世界にふさわしいシックなアイテムに変換しているのだ。

〔訳注：キャプション〕

「Items: Is Fashion Modern?」展の展示風景。左から：左ーアラン諸島の由緒あるフィッシャーマン・セーターを大胆な配色で南アフリカ風にアップデートしたLaduma Ngxokoloの作品；中央左ースタイリスタ（Stylista）ことAraba Stephens Akompi作のアンサンブル；中央右ーLoza Maléombho作のアンサンブル。両方ともオランダの生地会社Vlisco社のために製作した作品。同社は現在アフリカの新興デザイナー数名と協力をしている。
マーク・ウィッケンズが『ニューヨーク・タイムズ』紙のために撮影。

〔訳注：キャプション〕
左Orcival（オーシバル）社のフレンチ・セーラー・シャツ、1960〜70年代；シュールリアリストのためにカスタマイズしたBret.onのシャツ、2017年。マーク・ウィッケンズが『ニューヨーク・タイムズ』紙のために撮影。

衣服は注意深く選び抜かれ、カテゴリー分けして展示されており、これは恐らくMOMAにしか出来ない技だろう。ラグジュアリーをテーマとする小さなセクションには、使い古されたHermes（エルメス）の「Birkin（バーキン）」バッグ、Tiffany（ティファニー）のダイヤモンド、Rolex（ロレックス）の腕時計が含まれているものの、ドアノッカー・イヤリングやカスタム仕様のネイル・アートといったより安価に贅沢さを表現したアイテムがあるおかげで、ありがたみが薄れている。

全般に「Items」展は、世界中の人々がいくつかの複雑な理由――気候、個人のスタイル、経済、信仰、あるいは政治的スタンス――のために日常的に身に着けている衣服とアクセサリー類に焦点を合わせている。バイカー・ジャケット、チノ・パンツ、グアヤベラ・シャツ（キューバ・シャツ）、そしてカフィエやクーフィーヤと呼ばれるヘッド・スカーフが展示されている。このヘッド・スカーフに添えられたプロトタイプは、ベイルートに拠点を置く建築家サリム・アルーカディ（Salim Al-Kadi）が防弾素材「Kevlar（ケブラー）」で新たに製作したものだ。またリストにはトラックスーツ、パーカ、ダウンウェア、フリースなど、あらゆる種類のスポーツウェアとアウターウェアも載っている。一般の人々を非常に重視しているため、大きなサイズのマネキンのプロトタイプも含まれている（〔他の展示品は〕大部分が〔細身の〕サイズ・ゼロである）。

〔訳注：キャプション〕
シフト・ドレスを展示したMOMAの壁面。リリー・ピュリッツァー（Lilly Pulitzer）作から、1967年にハリー・ゴードン（Harry Gordon）がデザインしたボブ・ディラン（Bob Dylan）の絵柄の紙製「Poster Dress（ポスター・ドレス）」まで。このドレスの価格は3ドル程で、ファンの熱が冷めたらすぐに捨てられた。マーク・ウィッケンズが『ニューヨーク・タイムズ』紙のために撮影。

ここにChanel（シャネル）のドレスがあるかと思えば、あちらにはサリーが2点、エスパドリーユ、そして別の場所には美しいチャイナ・ドレスが2着あるという具合に、「Items」展はハイとロー、東洋と西洋、オートクチュールと普通の服の橋渡しをしている。しかし本展はかなりローの側に寄り添っているため、親近感を与える。さらに正確な起源を特定し、地域的なバリエーションやテクノロジーの進歩を記した表示や目録をプラスすることで、充実した展示内容になっている。ペンシル・スカートの構造が考察されていて、通常は20点のパーツがあるために、縫製作業が大変だった。しかしチェン・チイ（Chen Zhi）作のライクラとアンゴラを混紡したプロトタイプは、わずか3つのパーツしかない上、しわにもなりにくいのだ。あるいは、大英帝国発のカシミア製のショールから、最近のパシュミナ・ブームに至る歴史〔も展示されている〕。チュニックとゆったりしたパンツを組み合わせたパンジャブ地方のサルワーズ・カミーズが「歴史的にユニセックス」であったことも分かる。イスラム教徒の移民を通じて世界中で欠かせないアイテムとなり、影響を与えているのだ。時々、本展の題名にある「ファッション」という言葉が、まるで偽りの宣伝文句のように思える。むしろ「Clothes Are Everyone（衣服は私たち全員である）」とか、「Crowdsourced Personal Style（クラウドソーシングで収集したパーソナル・スタイル）」などという題名の方が良かったかも知れない。

〔訳注：キャプション〕
「Items: Is Fashion Modern?」の展示品にはCalvin Klein（カルバン・クライン）のブリーフ、「Spanx OnCore High-Waisted Mid-Thigh Short（スパンクス・オンコア・ハイウェスト・ミッド・サイ・ショート）」、「Wonderbra（ワンダーブラ）」が含まれている。マーク・ウィッケンズが『ニューヨーク・タイムズ』紙のために撮影。

口をあんぐり開けて「すごい！」という声がドア越しに聞こえてきそうな展示が、Chanelからリック・オウエンス（Rick Owens）に至るまでのリトル・ブラック・ドレスを集めて、密集隊形のように展示したコーナーだ。しかしもう一つの軍団は、肩すかしだ。何しろ「Wonderbra」、「Spanx」、フロントが逆Y字形（Yフロント）になっている男性用ブリーフなどの下着類が陳列されているのだから。だが、障がいを持つ女性向けのパンティホーズ（パンティ・ストッキング）は感動的だ。これはルーシー・ジョーンズ（Lucy Jones）がSomarta（ソマルタ）のために製作したプロトタイプである。その後に続くのが本展のキュレーションのハイライトの1つだ。その展示は1950年代のマタニティ・ウェアから始まり、〔抱っこバンドの〕「Snugli（スナグリ）」やファニー・パックを経て、Comme des Garçon（コム デ ギャルソン）が1997年に発表した風変わりな「Bump Collection（こぶ・コレクション）」からの球根のように膨らんだギンガム地のアンサンブルに至る。その中間にウェイ・ハン・チェン（Wei Hung Chen）の「Modular Dress（モジュラー・ドレス） 2.0」がある。調節可能なプリーツをたたんであり、妊娠中のお腹のふくらみに対応可能な上、服を着たまま授乳することも出来る。

〔訳注：キャプション〕
デザイナーのルーシー・ジョーンズが、身体に障がいがある人のために開発したタイツ、2017年。マーク・ウィッケンズが『ニューヨーク・タイムズ』紙のために撮影。

鮮やかな赤の「A-POC Queen（エイ・ポック・クイーン）」（A-POC＝「A Piece of Cloth／一枚の布」の頭字語）は、三宅一生と彼のもとでエンジニアリング・デザイナーを務めた藤原大が、チューブ状に編んだ1枚のニット素材から創り出したアンサンブルだ（〔マネキンの〕頭上にたなびいているのがその素材）。1枚の布で出来ている衣服とその経済性に関する壮大で包括的なアイデアの展示の一環であり、最大の見所である（カフタン、〔中東女性の民族衣装〕アバヤ、ジャンプスーツがこれに含まれる）。本展の最後で男性用スーツの歴史が再現されており、サヴィル・ロウ（Savile Row）の標準的なバージョン、トム・ブラウン（Thom Browne）と山本耀司による発展形、そして驚くほど肩幅が広いズート・スーツなどが展示されている。

〔訳注：キャプション〕
三宅一生と藤原大が創作した「A-POC Queen」。ロール状に巻いたファブリックを広げてゆくと、アンサンブル、手袋、バッグを作ることが出来る。1997年。マーク・ウィッケンズが『ニューヨーク・タイムズ』紙のために撮影。

例え小粒でも重要な物もあり、本展は時にささやかで平凡なアイテムの親しみやすさにも目を向けている。しかしそれぞれの衣服を見てみると、〔アリスが飛び込んだ〕ウサギの穴のように、物語と情報を秘めた素晴らしい世界の入口になっているものが多数ある。例えばヒジャブやサリーの着方、パナマ帽や7つ折りネクタイの製作方法が、ビデオで紹介されている。そして時には衣服とその動画が相まって、魔法のように魅力的な体験をもたらすこともある。例えばデザイン・スタジオのNervous System（ナーバスシステム）が作ったレースのように透ける「Kinematics（キネマティックス／運動学的）」ドレスがそうだ（色はもちろん黒）。「Kinematics」の4Dプリンティング・システムで製作されており、基本的にはそれぞれ大きさが異なるフラクタルの様な穴の集合体である。しかしこのドレスの真価は、その多様性にある。つまりこれは、どんなタイプの女性にも使うことができ、どんな服の上にも、あるいは素肌の上にも着ることが出来る、一種のジャンパー・スカートなのだ。

〔訳注：キャプション〕
左から右へ、リトル・ブラック・ドレス：Chanel、1925〜1927年；チャールズ・クリード（Charles Creed）、1942年；Dior（ディオール）、1950年頃；Givenchy（ジバンシィ）、1968年；アーノルド・スカージ（Arnold Scassi）、1966年頃。マーク・ウィッケンズが『ニューヨーク・タイムズ』紙のために撮影。

衣服そのものよりもフィルムの方がさらに輝きを放つ場合もある。デザイナーのハナ・タジマ（Hana Tajima）による素晴らしい短編動画には、三宅一生の黒いタートルネックが登場する。ミス・タジマはミッドセンチュリーの前衛的な音楽とダンスを背景に、ビートニクやブラック・パンサー（Black Panther）や、フェミニストやシャツとネクタイに飽きた男性たちによる異議表明のソフトな象徴としてのタートルネックと、ヒジャブおよびそれに対する西洋の無理

解を比較している。ヒジャブとは何よりもプライバシーの主張であり、「美を消費すること」への拒否であることを、狭量にも、そしてしばしば恐怖心から、西洋はこのことを理解出来ないのだと彼女は言う。計り知れない程貴重なこの展覧会には記憶に残る瞬間が多数あるのだが、彼女がフィルムで述べている主張もその1つだ。

それ以外にも本展には探求すべきものが沢山ある。あなたもMOMAを真似て、ぜひ真っ向から飛び込んでみて。
この秋、近代美術館（MOMA）が 1944 年以来となるファッション展を開催する。
「Items: Is Fashion Modern?（アイテムズ：ファッションはモダンか？）」展は、「前世紀を通して世界に深い影響を与えた 111 の衣服とアクセサリーの考察」であり、アメリカ文化に永続的または具体的な影響をおよぼしたピースに脚光を当てる。レディー・ガガ（Lady Gaga）の生肉ドレスよりも、むしろ「Levi's（リーバイス）501」や「Lululemon（ルルレモン）」のヨガ・パンツを考えて欲しい。生肉ドレスもそうだったかも知れないが、それらも同じくらいに深遠で、ほぼ間違いなく世界を変えたものなのだ。

本展のその他のピースには、「Converse All-Star（コンバース・オールスター）」や Calvin Klein（カルバン・クライン）のブリーフとともに、「Little Black Dress（リトル・ブラック・ドレス）」や「Wonderbra（ワンダーブラ）」などの「コンセプト・ピース」に改良を加えた数種のバージョンも含まれている。

テーマ別のギャラリーが数カ所設置され、その中にアイテムが体系的にまとめられている。サイズとフォルムというテーマに脚光を当てるスペースには「Wonderbra」がある一方で、テクノロジーにフォーカスするギャラリーには Issey Miyake（イッセイ ミヤケ）の「A-POC（エイポック）」と「Moon Boot（ムーン・ブーツ）」が展示される。別のセクションではつつましさ、内省、反逆の関係が考察され、フーディ、タートルネック、ヒジャブと並んで、ビキニ、スリップ・ドレス、レザー・パンツが展示される。パワーというコンセプトが、スーツとスティレット・ヒールのセレクションによって表現される他、アスレチック・ウェアや明白なメッセージを備えたピースも（グラフィック T シャツ

や「Birkin（バーキン）」バッグという形式で）、ここに展示される。

本展を企画したのはシニア・キュレーターのパオラ・アントネッリ（Paola Antonelli）で、そのアイデアは MOMA が前回行ったファッション展「Are Clothes Modern?（衣服はモダンか？）」から生まれた。前回の展覧会の質問を問い掛けたのは、73 年前にキュレーターを務めた建築家のバーナード・ルドルフスキー（Bernard Rudofsky）である。

「Items: Is Fashion Modern?」展は同美術館の 6 階全体で開催され、会期は 10 月 1 日〜2018 年 1 月 28 日だ。

〔訳注：キャプション〕
左から：ダシキ（Dashiki）、ドアノッカー・イヤリング、ダッチ・ワックス・プリント、撮影ーモニカ・モギ（Monica Mogi）；「Sleeping Bag Coat（スリーピング・バッグ・コート」を着用するデザイナーのノーマ・カマリ（Norma Kamali）、『Elle（エル）』誌 1990 年 9 月号、撮影ージル・ベンシモン（Gilles Bensimon）；ペンシル・スカート、撮影ーボビー・ドハティ（Bobby Doherty）。